

●『東方』二八五号より

現代中国文学研究三十年の軌跡

斎藤 敏康

はじめに

一九九六年に抗戦期の国民党系の文学・芸術、学術活動を解明した『十五年戦争期の中国文学』（以下『戦争期』と略称）を世に問うた阪口直樹氏が、この度『中国現代文学の系譜——革命と通俗をめぐって』（以下『系譜』と略称）を上梓した。これは、五年前に胃の全摘手術を行なったから、一進一退する病状と格闘する傍ら、三十年余に及ぶ探究の成果を「革命と通俗」をモチーフとした現代文学の系譜として秩序づけた、阪口氏の研究の集大成といえる。中国文芸研究会という場を通じて、阪口氏の研究を時には舞台裏も含めてリアル・タイムで観察する機会を得てきた評者としても、『系譜』とともに来し方を振り返ってやはり感慨を禁じえない。

ここでは、この三〇年間の現代中国文学研究をめぐるいくつかの問題状況に阪口氏の研究を位置づけながら、『系譜』が明らかにしたものを考えてみたい。

(一)『系譜』の構成

『系譜』の全体像を窺うために、まず第四編を除く目次を紹介する。

第一編 総論

I 現代中国文学研究の五〇年①

II 〃民国文学史〃の構想と課題②

III 〃救国〃と〃通俗〃の相克——二〇

世紀前半の小説③

第二編 民国期の文学

I 反〃俗〃の文学集団——学衡派④

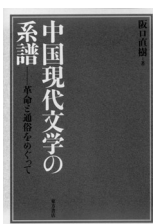
II 〃文芸大衆化論争〃と瞿秋白の位置

⑤

阪口直樹著

中国現代文学の系譜

——革命と通俗をめぐって

A5判 448頁
東方書店 [5250円]

III 比較 〃大衆の文学〃論——日本と中国の場合⑥

IV 二つの〃救国〃宣言をめぐって

——文学界の上海事変への対応から⑦

V 〃民族形式〃をめぐる論争——文芸大衆化問題の再燃と〃発展〃⑧

VI 陳蝶衣の通俗文芸論をめぐる⑨

VII 四〇年代抗戦文学と「特務」形象——通俗の問題をめぐって⑩

VIII 〃国統区〃文化活動における〃西南劇展〃の位置⑪

第三編 建国後の文学

I 蕭也牧と〃建国初期〃の中国文芸界⑫

II 中国社会主義リアリズム体制の確

立へ——胡風批判の一側面¹³

Ⅲ茅盾と青年作家育成政策——劉紹棠

への対応を中心に¹⁴

Ⅳ一九五八年中国新民歌運動の再検討

——文芸大衆化の視点から¹⁵

Ⅴ李建の『劉志丹』をめぐる——

九六二年中国当代文学の一状況¹⁶

Ⅵ文革後期における文学の様相

一、復刊『人民文学』第一～一四期

の「評論」にみるいくつかの特徴¹⁷

二、紹介『輝かしい道』¹⁸

Ⅶ湖北文学事情¹⁹

(※①～⑱は便宜的な通し番号)

第四編には、「書評その他」と題して

樽本照雄著『初期商務印書館研究』書評

をはじめ九篇の文章が収められていて、

一連の書評を通じた台湾文学についての

考察など見るべき指摘も存在するが、こ

こでは省略したい。

(二) 阪口直樹氏の研究生生活三十年と二

つの研究書

『系譜』に収められた最も初期の論文

は、文芸大衆化論争における瞿秋白の役

割を論じた^⑤であり、七二年八月に発表

されている。七〇年代前半はまだ文化大

革命が続いていた。多くのマス・メディア

が文革礼讃に走るなかで、現代文学研

究においては文革勢力が「暴いた」三〇

年代文学論に対する批判的検証ないし実

証的反論が大きな課題として意識されて

いた。この課題意識のもとで、『東洋文

化』四四号や五二、五六号の「一九三〇

年代中国文学特集」所載の充実した論稿

に見られるように、左翼作家連盟(左連)

を中心とする三〇年代文学に関する優れ

た研究はむしろ日本で展開されていた。

七〇年代から八〇年代にかけての阪口氏

の文芸大衆化論争に関する研究(⑤⑥⑧

八二、八六、八七)も、こうした文脈に

位置づけられる。

文革のただなかに在ってそれに同調

せず、そこで起こっている文化芸術をめ

ぐる事態についても批判的な眼差しを注

いでいた研究者にとつて、中国革命が文

革というカタストローフに帰着した、そ

の現実を前にして、すでにさまざまな問

題が見え隠れしていた。解放後、一七年

の文学・芸術に批判的視座が溯及するこ

ともまた当然であった。文革勢力が、一

七年の文学を基本的に「二つの路線の闘

争」として描き出したこともあって、そ

の意味からも建国後文学の再検討は不可

避であった。三〇年代研究と同時に進め

られた阪口氏の一七年の文学に対する実

証的なアプローチ、とりわけ胡風批判を

始めとする五〇年代の一連の文芸批判運

動に関する研究も、そのような課題意識

に基づいていたはずである。そしてその

企図は、中国的な「社会主義リアリズム」

論の検討とも絡めて胡風批判を論じた^⑬

や、早くも五一年の蕭也牧「私達夫婦の

間」批判に、その後の批判闘争の雛形を

認めた^⑫等、八〇年代中葉までに執筆さ

れ第三編に収録された論文において達成

されている。

しかし阪口氏の研究が躍動感を帯びて

くるのは、八〇年代後半にいたってから

であろう。そしてそれは氏の三〇年代文

学研究が進展し、学界でも一定の解明が

なされる中で、「左連中心史観」は三〇

年代文学の実相を捉えているかという疑問が氏の研究課題に昇華することから始まる。すでに文革勢力が暴露・批判を繰り広げたことよって、三〇年代を「輝かしい左連の十年」とするそれまでの権威的な学説は崩れていたが、竹内美氏の第三種人論争（六六）や丸山昇氏の国防文学論争研究（七二・七六）を通じて、三〇年代論争をそこに内在していた論理によって捉えると同時に、対象を左連の周辺へ広げようとする動向が生まれていた。その際に着目されたのが『現代』という雑誌であった。一九七〇年頃には左連系の雑誌を除けば、三〇年代初頭の文壇状況を曲がりなりにも俯瞰できる資料といえは『現代』くらいしか見当たらなかったという面もあるが、特定の政党政派の主張に従わないことを謳った『現代』は当時の研究者に三〇年代文学の広やかなバースペクティブを示してもいた。こうして、三〇年代研究から民国期全体を視野に置きながら、モダニズム文学、鴛鴦蝴蝶派、国統区・国民党系文学、淪陷区文学等へと広がっていった研究の成果

が八〇年代にいたって現れはじめる。阪口氏もまたこの時期の問題状況を非常に鋭く共有した一人である。こうした問題状況への氏独自のアプローチの跡は、すでに七四年に書かれた⑧の論文に見ることができる。八〇年代にはいつて、阪口氏はここから扇形にいくつかのテーマを同時展開している。その一つが現代文学像の再構築をめぐる課題であった。当時、中国でも「流派文学史観」などが現れ、続いて「重写現代文学史」の議論が起こってくることも、阪口氏にとって刺激になっていたのであろう。阪口（八一）は、中国文芸研究会有志が初めて中国旅行を行ない、中山大学で陸一帆教授と現代・当代文学について意見交換をした時の記録であるが、阪口氏がそれまでの氏自身の研究も踏まえて、現代文学史全体を、これまでの革命運動史からパラダイム・シフトしようと確信する端緒はここあたりを求めることができるのではなからうか。ともあれ、このテーマは後述する国民党系文化思潮研究を経て、九五年度の『図説 中国二〇世紀文学』に及び、

さらに近年にものされた①②③の仕事へと、文学史としては未完成ではあるが、一つの結実を見るのである。

阪口氏が、このように独自に現代文学展開のダイナミズムを構想する上で大きな影響を受けたのは、李沢厚の所謂「啓蒙と救国の二重変奏」（李沢厚八七、翻訳は坂元ひろ子他八九）である。中国の危機が招いた中国人の「文化心理構造」において、「救国」は「啓蒙」を圧倒した。救国の思想としてのマルクス主義も哲学的、理論的に深化するのではなく、戦略的、実用的に採用された、という李沢厚の理論を経て、阪口氏の一つには圧倒された「啓蒙」の分野に研究の方向を定めた。そしてそれは、国民党系の文化潮流を追った前著『戦争期』としてまとめ上げられる。今一つは「救国」と「啓蒙」の二重変奏を「革命」と「通俗」の二重変奏としてリایتした。これは、三〇年代大衆文学論、民族主義文学（⑭⑯⑰）、建国初期の文学と革命をめぐる摩擦、鴛鴦蝴蝶派（⑱）等の幅広い対象への関心と研究に立脚した阪口氏の、中国現代文

学展開のダイナミズムに関わる独自の着想であり、「発見」である。『系譜』の副題は勿論単なる思いつきではなく、現代文学がそのようなダイナミズムにおいて把握されることを実証しているが、それは阪口氏のように一貫した視点による多方面の蓄積があつてこそ初めて可能なることであろう。

阪口氏の固有の角度からいえば、氏は「左連中心史観」への疑問に発し、茅盾の国防文学論戦への関わりや『腐蝕』『子夜』の検討を通じて本格的な国民党文化思潮研究へと進んでいる。他方、八〇年代以降は民国史研究の飛躍的な進展という学界の研究状況の変化があり、阪口氏の研究（戦争期）も、民国史の「革命パラダイムからの離脱の試み」（西村茂雄（九八））の中に位置づけることもできる。その『戦争期』が阪口氏の最も独創的な研究であることは間違いない。そしてその研究にとつて転機になったのが、八七年の武漢大学における研修であつたこともほぼ間違いない。当時の「中国文芸研究学会会報」に載った「珞珈山の麓より」

（第四編所収）や⑪からは、エネルギーに奮闘する阪口氏の熱気が生き生きと伝わってくる。

また『戦争期』における国民党文化思潮研究の熱気は『系譜』にも引き継がれていて、④⑨⑩⑪がそれにあたる。特に④は学衡派に焦点を当てたもので、『戦争期』に収められた戦国派研究とともに文学研究の観点から民国期の学術に踏み込んで時代の文化潮流の特徴を明らかにしようとしたもので、今後の深化が期待される。かつて五四運動の中で作家としての出発をとげた謝冰心は、当時を振り返って「大学の門を入ると、私の足は教室へは向かわずに、いつも学生会の部屋へと向かつていた」と述べたが、比喩的にいえば、その時教室ではどのような講義が行なわれていたのかを視野の外に置いたままで「民国期の文化潮流」を論ずることはできないであろう。

会文化史をベースにした研究へシフトする傾向が強くなる中で、阪口氏の場合は、三〇年代の文学や学術の磁場における政治権力の問題を決して捨象していないことである。時代の政治権力の移動や帰趨を研究の視野の内に捉えているその視線は、氏が研究の対象としている当時の中国の文学者や文化人が保持していた視線とも重なるのではないかと思う。

『系譜』の全体を通観してみても、第二編の「民国期の文学」に配された論文は、国民党と共産党、あるいは革命と通俗の複雑な絡みに分け入っていて、重厚な読後感が残る。しかし、第三編の「建国後の文学」は、蕭也牧に関する論文など、評者には好ましいと感ぜられるものもあるが、全体として「状況整理」の域を出ない。それは、七〇年代の比較的早期の著作が多数を占めるという理由の他に、阪口氏に毛沢東「文芸講話」に対する正面からの分析が欠けていることによるという気がする。氏が個別に積み上げた建国時期の諸論考を踏まえて「文芸講話」の歴史的意味について論じておく必要が

あったのではないだろうか。

おわりに

「資料」を追いかけ「資料」と格闘しつつ齟齬と日を過ごすのが、いつの世も変わらぬ研究者の定めではあるが、阪口氏を含めて文革とその後の四半世紀を中国と付き合ってきた者には、「資料」についてまたひとしおの想いがあるのではなかろうか。文革時代は資料封鎖・凍結の時代、書店には魯迅と毛語録しかなかった。漸く文革が終了し、竹のカーテンの綻びから出始めた資料や情報に一喜一憂した八〇年代、そして洪水のように情報が溢れる九〇年代からこの方。その中で、阪口氏は「資料」について人一倍敏感であったという印象がある。文学（史）研究も実証科学としての側面を持つ以上、多くの資料・情報をどう選択し解釈するかは研究の生命線である。昨夜立てた論理が、今朝公にされた資料によって、烏有に帰するといった事態もなくはなかった時期、抜き刷りを「秘匿」したくなる気持ちは分からぬではない

し、論文イコール「ウンコ」だと斜に構えたい気持ちもよく分かる。しかし栄養素を吸収した後のカスと違って、論文はその人の脳味噌を絞った思考の成果であり認識の到達点である。存在意義がある限り適切な位置づけの下でそれを主張する権利が論文たちにはあるだろう。その意味で『系譜』に収められた阪口氏の論文は「著者のコメント」にエスコートされて、古くは三〇年以上前の論文までがほとんど元のままでその存在意義を今日に主張しえていることは驚きである。

六〇年代後半に中国文学研究を志し、文革批判を己の研究者としての原点に据えた者の小気味よい首尾一貫の姿勢を、評者はここに認めたい（拙文は中国文芸研究会六月例会での報告を基に、当日の出席者の意見も加えて纏めたものである）。

〔付記〕阪口直樹氏は八月二九日逝去された。六月の例会が氏の出席した最後の研究会になった。

【関連論文】

阪口直樹（八二）「当代文学再評価の視点」

（『野草』二八号）／（八二）「茅盾と『文芸工作者宣言』（『野草』三〇号）／（八六）「『文学』と茅盾——国防文学論争に関わって」（『伊藤漱平教授退官記念中国論集』汲古書院）／（八七）「初期国防文学論争における徐懋庸の位置——『論争』時期区分の試論をかねて」（同志社外国文学研究）四四・四六号

李沢厚（八七）『中国現代思想史論』

坂元ひろ子他（八九）『中国の文化心理構造』

（平凡社）

西村成雄（九八）「方法としての中国二〇世紀史の試み——阪口直樹著『十五年戦争期の中国文学』の叙述に即して」（『野草』六一号）

竹内実（六六）「第三種人」をめぐる論争」

（『東洋文化』四一号）

丸山昇（七二）「国防文学論戦について」

（『東洋文化』五二号）

丸山昇（七六）「周揚らによる『歴史の歪曲』について——国防文学論戦と文化大革命」

Ⅲ（『東洋文化』五六号）

（立命館大学）